シンポジウム「動物園は野生動物を救えるか　新たなる動物園への道」

討論（概要）　　　司会　岩野

岩野：小菅さんと木下先生とは同じような話をいただいたような気がします。木下先生が言われたように小田原動物園の閉園など、動物が簡単に手に入らないということも含めて動物園も歴史的なライフスパンがあるのでしょうか。しかし私たちは動物園には新しい使命もあると思い、このシンポジウムの副題も「新たなる動物園への道」としました。小菅さんにはまず現在の動物園が危機的だと思う実感をお聞きしたい。

小菅：園長になる頃、旭川市から「動物園の役割は終わった。だから要らない」と言われました。「人間が動物である限り、動物とともに生きていきたい」という原点に立ち返らなければならないと思いましたね。

木下：動物園がなぜ必要なのかということが社会的に共有されていないと思います。動物園の力を訴えていく必要があると思います。このままだと力尽きてしまう感があります。

岩野：旭山動物園が再生に成功したので、動物園を改造すると人数がついてくると思っています。動物園は入園者数ではなくて、教育的効果を評価すべきではないでしょうか。それと動物園が持つ科学性。長嶺さんはヤンバルクイナの繁殖が成功したのは動物園の力があったからだと言われましたが。

長嶺：自分たちの活動には歴史がないと実感しています。知ってもらわなければならないことや知らなければならいことがたくさんあって、それを動物園は当たり前のようにやってきたということに驚きを感じ、またそれを素直に教えてくれたことに感謝しています。

岩野：動物園にはスタッフと時間がないため、長嶺さんたちがやってきたような野外調査などあまりできませんでした。小菅さんは何が動物園に足らなかったと思いますか。

小菅：やはり現地調査でしょうね。ゾウばかりでなくキクガシラコウモリも繁殖させられなかったのは現地での彼らの生活を知らなかったからでしょう。いつも先に動物が入ってきて、飼育するというのがやっというのが動物園の現状でした。日本の種でも調査がままならないのに、海外種にまではとても手が届かない。だけど動物園の多くの動物種は海外のものです。

岩野：木下先生、動物園の文化的な役割とは何でしょうか。見世物的なものがあったことは否定しませんが、これからもそのような傾向で進むのでしょうか。

木下：珍しいものを求める気持ちは変わらないかもしれません。珍しいという中身は違ってくるかも知れませんが。最近の傾向としては地域の動物に目が向いているので、それも珍しさを見いだせるものになるかも知れません。活動の方向性を決めて進む覚悟が動物園側に求められていると思います。

岩野：長嶺さんは主に域内保全を行ってこられましたが、動物園はどちらかというと域外保全だと思います。動物園での保全活動に関する関心はおありですか。

長嶺：学生時代は、野生動物保全活動にあまり関心がないのが動物園だと思っていましたが、実は繁殖に関する実務的能力が非常に高いというのが分かりました。保全のためには、これらの力を共有することが必要だと思います。

岩野：広島市の安佐動物公園におけるオオサンショウウオの繁殖は、域外調査と自園での研究の融合という画期的事業として高く評価されるべきですが、これ以降そのような事例が少ないのです。また、地方の動物園の危機的状況はそれのみならず、高速交通網の発達により時間的距離が地理的距離よりも短くなり、時間的近隣空間に多くの動物園が存在し、競争が激化したため入園者数という数的評価が重要視されるようになったことです。だとすると同じような動物園は必要ないということになります。
小菅さんは地方動物と国立動物園の関係のことを言われていましたが。

小菅：地方動物園と国立動物園との役割分担が必要です。ゾウの繁殖がよい例です。地方動物園がゾウを繁殖するために海外支援することは不可能ですから、これは国がすべき事業です。例えば温暖な九州の地で現在の動物園がゾウに占めるエネルギーを一か所にまとめると、繁殖やその生態を子どもたちに伝えるということに繋がるかも知れません。

岩野：木下先生、動物園の危機感、たとえば収集できる動物が少ない、財政難、動物福祉などの問題を超えて新しい動物園像はありますか。

木下：地域に密着した動物園も一つの方向だと思いますし、国立動物園の構想にもあるような動物園の連携・ネットワークも必要だと思います。全国の個別の動物園はどのような連携が可能なのでしょうか。

小菅：公立動物園は地域のための動物園なので地球的・全国的視野を持っていません。が飼育現場はそうではありません。国立動物園がそのお手本を示すべきです。そうなれば自治体は国の方針を踏襲するから地方動物園も変わる可能性があります。

岩野：長嶺さんがされている事業は動物園がすることですか。

長嶺：私たちがしていることは地域が元気になる事業でもあります。動物園はヤンバルクイナの繁殖で示したように高い技術を持っているのにそれを過小評価しているように感じていま

す。

岩野：以前、野生動物の研究者に野生動物研究と飼育の現場の統合をはかろうじゃないかと話したことがあります。背を向けずに協力し合おうということです。また学問研究を動物園で開示するということでもあります。今回のシンポジウムの大きな目的は是が非でも国立動物をということではなくて、問題提起をしたいと思っています。小菅さんが言ったように九州で亜熱帯の動物を飼育して、北海道では寒帯の動物を飼う。SMART SHRINKという言葉がありますが、まさに賢く小さくするということに繋がるかもしれませんし、ネットワーク、国立動物園と地方動物との関係にも繋がるかもしれません。

では会場のご意見をお聞きします。

Ａ ： 長嶺さんにお伺いします。沖縄にもヤンバルクイナを飼っている動物園があります。長嶺さんは動物園の技術を誇っていいと言われましたがそれはどんなことですか。

長嶺：第一に長生きしている。しかし飼育下繁殖をしなかったのでそのアピールをしていませんでした。しかし長生きさせるということは凄いことです。

Ａ ： それ自体が重要なデータということですね。

長嶺：15年以上生きている例がありませんので、そういうことです。

Ｂ ： 小菅さんに。①国が見本を作るべきというのは時代遅れでは。②国立動物園が本当に必要なのか。希少動物繁殖センターでいいのでは。展示が必要か。③日本動物園水族館協会の改革が必要なのではという３点にお答えください。

小菅：①に対しての答えですが自治体は国を手本としているからです。②繁殖保護センターは国民の目に触れません。展示をすると動物園利用者４０００万人に研究者の努力や積み重ねを知ってもらうことができます。③日動水協の改革についてですが、会員は園長です。その園長がどのくらい動物園、動物について知っているかは甚だ疑問です。その集合体としての協会の改革は非常にハードルが高いと言っていいでしょう。

岩野：木下先生、研究と展示を行う歴博や民博を持つ人間文化研究機構についてお話し願えますか。

木下：国立動物園に展示がいるかどうかということは非常に重要です。先行する例としては民博・歴博があるとは思いますが、民博よりも歴博の方が展示ごとのプロジェクトチームを作り、力を入れているという印象を受けます。博物館が展示を外せないのと同じように国立動物園も展示は外せません。動物園には飼育技術が蓄積されて、動物園外の人との連携も重要だと思います。

岩野：研究は多くの人に知ってもらってこそ輝きを増すものだと思います。また展示も研究を付加することによってその価値が上がるのだと思います。また今までのように多くの発展途上国から動物を略奪するのではなくて、これからは生息地と結びついているような関係が必要だと思います。これは国と国という関係なしにはありえません。

最後の質問をお願いします。

C ： 民間でもサンディエゴZOOのように寄付を仰いで、素晴らしい成果を残しているところが多いが、小菅さんが国立動物園に固執するところは何ですか。

小菅：海外のように寄付が普通に行われているところならまだしも、日本ではそのような文化がありません。やはり国が主導する方がよいのだと思います。国立動物園を議論する意味がここにあると思います。

岩野：長時間ご論議ありがとうございました。今回のシンポジウムが動物園を考えることに繋がればいいのかなと思います。

小菅：私は今日、トキのネクタイをしてきました。日本で絶滅したトキを中国から移入して繁殖したら、警戒レベルを下げようなんて話がありますが、絶滅する前に動物園で飼育していたら、日本の空からトキがいなくなることは無かったのではないかと思います。トキやホンカワウソに限らずこのような取り組みこそ国として必要なことではないでしょうか。みんなでこのような問題を考える場を作っていきたいと思います。

ありがとうございました。